

メッセージアウトライン 詩篇118：1～18「主に感謝せよ」

[1-4] 賛美への招き

「主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。さあ、イスラエルよ 言え。『主の恵みはとこしえまで。』さあ、アロンの家よ 言え。『主の恵みはとこしえまで。』さあ、主を恐れる者たちよ 言え。『主の恵みはとこしえまで。』」

作者は「主に感謝せよ」と呼びかける。その理由は、主はまことにいつくしみ深く、その恵みはとこしえまでであるからである。

「いつくしみ」も「恵み」も主なる神の御性質であり、神の人間に対する過分の御恩寵とあわれみを表すものである。

主なる神は冷酷で怒りやすく、残忍なお方ではない。どんな時でも見捨てずに導き、守り、支え、愛をもって取り扱ってくださるすばらしいお方である。

それゆえ、主を信じる民は心から主に対して感謝し、また賛美すべきなのである。

私たちもこの一年の守り、導き、祝福を覚え、心から主に感謝したい。

イスラエルに対するこの呼びかけは、彼らが主を信じる民であり主によって選ばれた民であるからである。主を知らない人々は主を賛美し、感謝することはできない。それゆえ、主を賛美し感謝することは主を知らない国々の中であって、主のすばらしさをはっきりと証しすることになる。

「アロンの家」とはイスラエルの祭司の家系であるが、この場合は神の民イスラエル全体を指すと考えられる。「主の恵みはとこしえまで」が1～4節の間で三度繰り返されている。いかにイスラエルが主の恵みによって守られ支えられ、導かれてきたか、愛されてきたか、作者はよくわかっている。彼はイスラエルの民はその思いをもって主に感謝することを勧めるのである。

「主を恐れる者たちよ」…残念ながら血肉によるイスラエルの民すべてが信仰を持っていたわけではなく、ある者は表面的、形だけの者であったであろう。それで4節では的が絞られて、主を恐れる真の信仰者たちに対する呼びかけとなっているのである。

[5-9] 主は私の避け所

「苦しみのうちから 私は主を呼び求めた。主は答えて 私を広やかな地へ導かれた。主は私の味方。私は恐れない。人は私に何ができよう。主は私の味方。私を助ける方。私は 私を憎む者をもものとしめない。主に身を避けることは人に信頼するよりも良い。主に身を避けることは君主たちに信頼するよりも良い」

ここを読むと彼は多くの苦しみの中にあつたことがわかる。彼は敵から憎まれ、いのちを狙われていたのかもしれない。敵だけではなく、身近な者の中にも彼に敵対する者がいたのだろう。内も外も危険に満ち、憎しみや殺意の渦巻く中で、人は平常心でいられるだろうか。体調を崩し、意気消沈し、

恐れ、失望し、病気になってしまうのではないか。

彼はそのような中で、主に助けを呼び求めた。すると、主は彼の叫びに答えてくださった。「広やかな地」…つまりくことのない安全な場所。敵から遠く離れた自由で安全な場所。これは距離的なことよりも、彼の心の状態を指しているのかもしれない。

「主は私の味方、私を助ける方」(7)…彼は単なる理屈や思い込みではなく、信仰によって主なる神が彼の味方であることを確信するに至った。それゆえ、もはや人を恐れることをしないのである。→ローマ8:31

たとえ彼を助けてくれる人が何人かいたとしても、主はその中の一人ではない。主ご自身が完全な助け主であり、それで十分なのである。このようなお方が味方であることは何とすばらしいことであろうか。それで彼は彼を憎む者をもものともしないとすることができたのである。

「主に身を避けることは人に信頼するよりもよい」(8)…これが彼の確信であり、信仰者のよって立つべきところである。9節も同じ内容である。力ある君主も人に過ぎない。

[10-14]主は私の力

「すべての国々が私を取り囲んだ。しかし主の御名によって 私は彼らを断ち切る。彼らは私を取り囲んだ。まことに私を取り囲んだ。しかし主の御名によって 私は彼らを断ち切る。蜂のように 彼らは私を取り囲んだが茨の火のように消された。主の御名によって 私は彼らを断ち切る。おまえは私を激しく押し倒そうとしたが主が私を助けられた。主は私の力 またほめ歌。主は私の救いとなられた」

「すべての国々が私を取り囲んだ」…文字通りではなく、それほど多くの敵が彼の周りにいたということ。しかし彼は「主の御名によって 私は彼らを断ち切る」と言う。このことばは10～12節で3度も繰り返されている。「主の御名」…生ける力ある神の本質を表わすことば。出エジプト記3:13節以下でモーセが主によって出エジプトの指導者として立てられた時、イスラエルの民がその神の名は何かと聞いてきたら何と答えたらよいでしょうかと問う場面がある。これに対して主は「わたしはある」というものであると言われ、さらに、「あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が、あなたがたのところに私を遣わされたと言え」と答えられた。主は彼らの先祖たちを選び、助け、力を与え、導いてきた力ある神であり、人間の作り上げた空しい偶像の神々ではなく、力のない神々でもない。たとえ宇宙全体が存在しなくなってもこのお方は存在する。このお方は万物の存在の根源なるお方であり、無から有を生じさせることのできる、生ける力あるお方なのである。それゆえ、「主の御名によって」とは「生けるまことの神、力ある主ご自身によって」という意味であり、彼はこの主なる神に全面的に信頼することによって敵を打ち破り、逆境を克服しようと決意しているのである。

「蜂のように、彼らは私を取り囲んだ」(12)蜂は一刺しで人に大きな痛みを与える。特にそれがスズメバチのような蜂ならば死んでしまうかもしれない。

それが群れをなして取り囲んだということは大きな恐怖を与えるのである。「私を取り囲んだ」このことばは10～12節で4回も繰り返されている。これは敵の憎しみや熱心さをよく表している。しかし、そのような執念深い敵も、彼が主の御名、主の助けにより頼んで対決することによって、茨の火があつという間に燃え尽きてしまうように滅ぼされてしまうのである。

13節で彼は敵を「おまえ」と二人称の単数で呼ぶ。しかし、これまで見てきたように敵はたくさんいるので、この「おまえ」というのは敵全体の象徴的表現と考えられる。彼は敵に激しく押し倒されそうになった。これは彼の死を意味する表現である。確かに彼が自分一人の力に頼っていたならば倒されてしまったであろう。しかし、実際は主が助けてくださったので、彼は倒れることがなかったのである。彼の信頼に答えて主なる神の大いなる力がこの時に現わされたのである。

「主は私の力」(14)…彼は自分の弱さを率直に認め、自分が敵から守られるのはただ主の力によるということを告白している。

「またほめ歌」…自分のうちに誇りとするものは何もなく、自分が敵から救われたことのほめ歌、つまり賛美はただ主にのみささげられるものであるということを告白している。

「主は私の救いとなられた」…つまり救ってくださったということの告白。信仰者にとって主こそ力であり、ほめ歌であり、救いなのである。

[15-18]勝利の歌

「喜びと救いの声は、正しい者の幕屋のうちにある。主の右の手は力ある働きをする。主の右の手は高く上げられ、主の右の手は力ある働きをする。私は死ぬことなく、かえって生きて、主のみわざを語り告げよう。主は私を厳しく懲らしめられた。しかし 私を死に渡されはしなかった」

「正しい者」…原文は複数形。彼は今まで個人の体験を語ってきたが、実は彼ばかりではなく、彼と同様に正しい者たち、つまり主を恐れる信仰者たちも同じように、その生涯において、力ある主の助けを体験することができる。そして彼らはその幕屋、すなわち自分の家において主によって救われたことの喜びの声をあげることができるのである。

「右の手」…力や権力の象徴であり、この表現が三度繰り返され強調されている。

「高く上げられ」…力強く勝ち誇ったありさま。何の力もない偶像のむなしい神々とは違って主なる神は力ある働きをされ、信仰をもってより頼む者を守り、助け、救ってくださるのである。

「私は死ぬことなく かえって生きて…」(17)…彼は迫りくる危険と絶望の中で死を間近に感じていたのであろう。しかし、その死の危険と絶望から主によって救い出された彼は、自分を救ってくださったすばらしい主のみわざを語り告げることを決心する。

「主は私をきびしく懲らしめられた」(18)…彼は自分が敵によって苦しみを受けたのは、彼らを通して主によって懲らしめられたのだと受けとめた。主はしばしば信仰者に対してこのような方法を用いられ、それによって人は怠惰から目覚め、肉の性質は無力化され、汚れはきよめられ、主に従順に従う

者と変えられる。望みがあるからこそ、主は人を懲らしめられるのである。「しかし私を死に渡されなかった」…主は彼を懲らしめられたが、しかしそれは死に至るほどではなかった。ちょうど良い時にそれはとどめられ、彼を救い出し、自由を与え、平安を与えてくださった。

私たちも人生において様々な苦しみ、悲しみ、危険に取り囲まれ、どのようにしてもそこから脱出できないことがあるかもしれない。しかし私たち信仰者はそのような状況にも神の御手を見ることができる。そして信仰をもって主に助けを呼び求めると、主は確かに私たちを救い出し、問題を乗り越えさせてくださるのである。

私たちもこの作者と同様に、そのようなところを通して成長させられていくのである。

私たちもこの一年の最後の礼拝にあたって、主が今までになしてくださった様々ないつくしみ、恵みを思い返して、心から感謝と賛美をささげる者になりたい。そして何よりも大切なことはこの詩篇作者の場合は死の危険からの救いであったが、主は私たち信じる者を罪と死と滅びから救い出してくださいということ、永遠のいのちを与えてくださったということである。

主なる神はそのひとり子イエス・キリストを私たちのために与え、私たちの罪の身代わりとして十字架につけられ、その死によって私たちの罪を贖われたのであった。それほど神は私たちを愛していてくださるのである。→ヨハネ3：16

このすばらしい神の愛にこたえて、私たちはこの地上で生きる限り、そして召されたならば天において賛美と感謝をささげ続けていきたい。

この一年の守りと導きと恵みを感謝しつつ、新しい年もそのような思いをもって歩んでいきたい。